



中国語・日本語母語の英語学習者および英語母語話者による英作文の対比型連結副詞類の使用実態：学習者コーパスに基づく量的研究

FU, Gang

(Citation)

統計数理研究所共同研究レポート, 484:108-123

(Issue Date)

2026-03-25

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD01)

<https://doi.org/10.24546/0100502566>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100502566>



中国語・日本語母語の英語学習者および英語母語話者による英作文の

対比型連結副詞類の使用実態

—学習者コーパスに基づく量的研究—

FU Gang(神戸大学・大学院生)

1981529617qq@gmail.com

The Usage of Contrastive Linking Adverbials in English Essays Written by
Chinese, Japanese Learners of English and English Native Speakers

—Quantitative Research Based on Learner Corpus—

FU, Gang (Kobe University, Graduate Student)

概要

連結副詞は文章の論理構築に極めて重要な部分であるが、中国語母語(CLE)・日本語(JLE)の英語学習者は連結副詞の使用に過剰・過少に使用する傾向がある。そのため、本研究は中国語・日本語の英語学習者による対比型連結副詞の使用実態を英語母語話者と比較し、使用傾向を細部まで明らかにすることを試みる。分析するデータは、アジア圏国際英語学習者コーパスであるICNALE(International Corpus Network of Asian Learners of English)の英作文データWritten Essays(2.6)を使用する。英作文データのトピックは「大学生アルバイトの是非」と「レストラン全面禁煙の是非」である。結果として、(1)CLEとJLEは特定の対比型連結副詞を過剰使用・過少使用することがある、(2)CLEとJLEの対比型連結副詞使用は習熟度と関連し、対比型連結副詞別に異なる変化パターンが観察される、(3)CLEとJLEは対比型連結副詞を文頭に過剰使用する傾向がある、(4)JLEの対比型連結副詞の使用は、習熟度の上昇につれても、母語話者に接近しないことが示唆された。これらの知見は、現場における日本語・中国語母語話者の対比型連結副詞の指導に還元されると考える。

キーワード

対比型連結副詞、学習者コーパス、ライティング

1. はじめに

英語には、「節、文、またはより大きな談話単位の間」、意味的關係を明示的に示す役割を果たす語彙項目(Biber et al., 1999, p867;英文全文からの翻訳は拙訳による。以下同)として、連結副詞(linking adverbials)(Biber et al., 1999)と呼ばれる単語ゼットが存在する。英語学におい

て、連結的接続辞 (connective adjuncts) (Huddleston & Pullum., 2002) や、連結助詞 (linking adjuncts) (Carter & McCarthy., 2006) と呼ばれる場合もある。

以下の用例をみてみよう。なお、連結副詞には下線を付す。

- (1) Tom's parents love each other. Therefore, they always like to take care of each other.
 (2) Tom's parents love each other. However, they sometimes fight with each other.

(1)であれば、therefore を用いることで、後接要素が、前接内容に続いて、論理的に予想される内容であることが示される。一方、(2)であれば、however を用いることで、後接要素が、前接部から予想されるものと異なる内容であることが示される。英語では、様々な連結副詞を用いることで、前接要素と後接要素の間の多様な論理的関係性を示すことができる。

連結副詞の数と種類について、Carter & McCarthy (2006)は連結副詞を additive、concessive、contrastive、inference、listing、meta-textual、resultative、summative、time の9種に区分している。一方、Biber et al. (1999)は連結副詞を、6種類に区分している。研究者によって、連結副詞とみなす語の範囲と内部分類には違いがあるが、最近の研究で広く引用される Biber et al. (1999)に従えば、6種の内訳は以下の通りとなる。

表 1

Biber et al. (1999) による 6 種類の連結副詞

意味タイプ	該当する連結副詞表現の例
対比 (contrast)	on the other hand, in contrast, alternatively, however
並置 (apposition)	which is to say, in other words, i.e., that is, for example, for instance
追加 (addition)	first, second, lastly, for one thing, for another, in addition, further
推論 (inference)	therefore, consequently, thus, so
総括 (summation)	in sum, to conclude, overall, altogether, in short
転換 (transition)	incidentally, by the by, by the way

これらのうち、英作文において特に重要となるのが、(2)の用例に使用された however などの「対比」型連結副詞である。なぜなら、アカデミックライティングでは、通例、物事の長所・短所、利点・欠点など、相反する2つの要素を提示しつつ、自身の主張を組み立てていくからである。

英語の中で、対比型連結副詞は様々な形で使用されるが、英語学習者にとって、その習得は必ずしも容易ではない。以下は、アジア圏国際英語学習者コーパス ICNALE の英作文データ(詳細は後述)に含まれる、中国語を母語とする英語学習者 (Chinese Learners of English: CLE) と日本語を母語とする学習者 (Japanese Learners of English: JLE) による例文である。

- (3)... It is because smoking have so many advantages that lots of people are

addicted to it. However, on the other hand, smoking's disadvantages are much more compared to advantages.... (CHN_SMK_310_A2)

- (4)... I agree students to have a part-time job. I have no part-time job now, but I had it three months ago. However I earned a little money, I could bought things I need when I was having it. But I am depending on money sending from my parents now.... (JPN_PTJ_112_A2)

両作文とも、対比型連結副詞を使用しているが、その用法はかなり不自然である。(3)では、意味の重なる *however* と *on the other hand* が並置され、(4)では、前接内容(今はアルバイトをやっていない)と後接内容(お金を少し稼いだ)が対比関係にないにもかかわらず *however* で無理やりつなげられている。また、いずれの用例でも *however* は文頭に置かれているが、母語話者(English native speakers: ENS)はしばしば *however* を文中で使用する(例: I, however, earned a little money)。

こうした現状をふまえると、英語教育で必要になるのは、母語話者と、アジア圏の英語学習者がそれぞれどのように対比型連結副詞を使用しており、そこにどのような違いがあるかを科学的に解明することになるだろう。これにより、より良い英語指導の指針を得ることができる。この目的に沿って、本稿は、以下、学習者コーパスを使用し、アジア圏の CLE と JLE、および、ENS の対比型連結副詞の使用を計量的に調査していく。

2. 先行研究

アジア圏の英語学習者による連結副詞の使用を調査するにあたり、中国語母語と韓国語母語の英語学習者が使用する連結副詞の特徴について、先行研究の知見を概観する。

Leedham & Cai (2013)は、BAWE (British Academic Written English)コーパスやイギリスにいる中国の留学生から少数の追加課題を使用し、イギリスの大学で勉強する中国人学生の英作文における連結副詞の使用に関して、英語母語話者と比較しながら考察した。その結果、イギリスの大学で勉強する中国人学生は 9 つの連結副詞を過剰使用し、2 つの連結副詞を過少使用する。過剰使用する傾向が見られる連結副詞は、*Besides, in other words, meanwhile, what's more, on the other hand, nevertheless, last but not least, in the long run, at the same time* である。過少使用する傾向が見られる連結副詞は、*however, therefore* である。

Wang, Y. (2022)はアジア圏英語学習者コーパスである ICNALE と中国語母語の英語学習者から 96 件の追加課題を比較しながら、中国人学習者と韓国人学習者が英作文における連結副詞の使用傾向を考察した。結果として、英語母語話者は、逆接の連結副詞(29.01%)と順接の連結副詞(29.83%)をほぼ同じ割合で使用している。中国人の EFL 学習者は、順接の連結副詞よりも追加の連結副詞をより頻繁に使用する。一方で、韓国人の EFL 学習者は、順接の連結副詞の使用率が最も高く、全体の 29.90%を占める。また、非母語話者は、4 つの典型的な連結副詞を文頭に使用する割合がすべて 90%を超えていた。一方で、中国人学生は *therefore* と *thus* を文

頭で過剰に使用する傾向が見られた。

Shi, J. (2017)は Spoken English Corpus of Chinese Learners を目標コーパスとしながら、The Michigan Corpus of Academic Spoken English を参照コーパスとして、中国人英語学習者の対比型連結副詞の使用を考察した。その結果、中国人英語学習者は英語母語話者と比較すると、中国人英語学習者は対比的・譲歩的な連結副詞を発話で有意に少なく使用する傾向がある。また、学習者と母語話者の両者とも、発話において限られた種類の対比的・譲歩的な副詞に大きく依存している、学習者は特定の副詞を過剰に使用し、他の副詞を過小に使用する傾向が見られる。過剰使用の一因として考えられるのは、学習者が不要な連結副詞を用いてテキストをつなぎ、表面的な論理性を確立しようとする傾向があることである (Chen, 2006; Lei, 2012)。さらに、学習者は対比的・譲歩的な連結副詞を文頭に置くことを好む傾向がある。その傾向は母語の影響によるものであると指摘した。

上記の先行研究は、学習者コーパスの英作文における連結副詞の使用を、計量的手法を踏まえて考察している点において、価値ある知見を示しているが、いくつか方法論的制約があると思われる。(1) 中国人学習者と韓国人学習者の比較があるが、中国人学習者と日本人学習者の比較はない。(2) 習熟度の影響が議論されていない。(3) 連結副詞と国や習熟度の相互関係は調査されていない。そこで、本研究は、アジア圏英語学習者コーパスである ICNALE を使用しつつも、(1) 中国人学習者と日本人学習者を比較すること、(2) 学習者の習熟度による変化を導入すること、(3) 連結副詞の使用と国や習熟度の相互関係を全体的に把握することを中心として、リサーチデザインの構築に 3 点を考慮する。

3. リサーチデザインと手法

3.1 研究目的と RQ

本研究では、Halliday & Hasan (1976)および Liu (2008)の 2 研究のいずれかまたは両方で分析対象とされた対比型連結副詞(計 12 種)を調査し、中国人学習者 (CLE)・日本人学習者 (JLE)・英語母語話者 (ENS)による作文中の対比型連結副詞使用実態の差を解明し、指導の指針を得る。

Granger (2015)が提唱する改訂版の中間言語対照分析 (Contrastive Interlanguage Analysis: CIA)では、参照データ(母語話者データを含む)と学習者データにおいて、多様性に配慮した比較を行うことが強調されている。それを踏まえて、本研究の分析にあたっては、(1)全体使用度、(2)習熟度の変化、(3)相互関係の 3 つの観点で調査を行う。

以上の点を検証するため、以下の 3 つの研究設問(RQ)を設定する。

RQ1 12 種の対比型連結副詞について、CLE/JLE の使用度は ENS と同等か？(全体使用度別比較)

RQ2 12 種の対比型連結副詞について、CLE/JLE の使用度は、習熟度が上昇すると ENS と

同等になるか？(習熟度別比較)

RQ3 12種の対比型連結副詞を手掛かりにした場合、CLE、JLE、ENSはどのような相互関係にあるか？また、CLE、JLEの習熟度上昇はENSへの近接を意味するか？(相互関係別比較)

3.2 データ

本研究では、神戸大学の石川慎一郎研究室において開発された、アジア圏英語学習者コーパス(International Corpus Network of Asian Learners of English: ICNALE)の英作文データ Written Essays(2.6)(以下、WE)を使用する。ICNALEは、アジア圏10か国・地域の大学生による作文・独話・対話などを集めた国際英語学習者コーパスである。WE所収の作文データは2種類に分けられ、「大学生アルバイトの是非」と「レストランでの全面禁煙の是非」である。また、事前設定として、1作文あたりの執筆時間は20分から40分であり、作文の語数は200語から300語まで制約されている。英作文データは、条件統制の下で収集され、データ収集に参加した大学生はCommon European Framework of Reference for Languages(CEFR)(Council of Europe, 2020)に基づく4つの習熟度段階(A2、B1_1、B1_2、B2+)に区分されている(Ishikawa, 2023)。

本研究では、中国、日本の英語学習者による作文データ、および母語話者の作文データ(大学生、教師、その他職業の3職業属性)を使用する。また、ICNALEに収録される英作文のトピックは二種類があり、「大学生アルバイトの是非」「レストラン全面禁煙の是非」である。本研究は、両方のトピックを分析の対象とする。

3.3 手法

3.3.1 データの事前処理: 調査対象になる対比型連結副詞の選定

本研究では、Halliday & Hasan (1976) および Liu (2008)のいずれかで扱われている対比型連結副詞すべてを分析対象とする。具体的な項目は以下の通りである。

表 2

2種の先行研究における対比型連結副詞

抽出する対比型 連結副詞	however	on the other hand	at the same time	but	and	in fact	actually
H&H (1976)	○	○	○	○	○	○	○
Liu (2008)	×	○	×	×	×	○	○

as a matter of fact	conversely	in/by comparison	in/by contrast	in reality
○	×	×	×	×
○	○	○	○	○

これにより、全体で 12 種の対比型連結副詞が本研究の対象となる。

3.3.2 分析の手順

以下、RQ 別に手法を概観する。RQ1 では、中国語・日本語母語の英語学習者の作文データを分析し、CLE と JLE による対比型連結副詞の調整頻度を算出する。その後、母語話者による対比型連結副詞の調整頻度と比較し、過剰使用や過少使用に関しては、カイ二乗検定で有意差の検証を行う。

RQ2 では英語学習者の作文データを分析し、CLE と JLE を習熟度別に、対比型連結副詞の調整頻度を算出する。この際、学習者の習熟度を A2 レベル、B1_1 レベル、B1_2 レベルと B2+ レベルに分類する。その後 RQ1 と同様に、母語話者による対比型連結副詞の調整頻度と比較する。

RQ3 では CLE と JLE による 12 種の対比型連結副詞のうち、8 種の対比型連結副詞の用例が圧倒的少なかったため、8 種の対比型連結副詞を除外する。残り 4 種の対比型連結副詞の用例を分析し、分のどの位置で使用されるかを確認する。

RQ4 では対比型連結副詞(12 種)、英語学習者と母語話者による調整頻度データ(9 種)の計 21 種のデータをデータシートに導入する。調整頻度が導入されたデータシートを使用し、対応分析を実施する。

以上が、本研究の各 RQ における手法である。なお、統計手法に関しては無償で使用可能な統計プログラムである HAD 18.0(清水, n.d.)を使用する。

4. 結果と考察

4.1 RQ1 英語学習者と母語話者が使用する対比型連結副詞の全体使用度

CLE、JLE、ENS の各々が使用した 12 種の対比型連結副詞について、実頻度と、1 万語あたり調整頻度を調査したところ、表 3 の結果を得た。なお、調整頻度はカッコ書きで記載している。

表 3

CLE、JLE、ENS が使用する対比型連結副詞の実頻度と調整頻度

対比型連結副詞	CLE (総語数:191401)	JLE (総語数:179041)	ENS (総語数:90613)
however	255 (13.32)	218 (12.18)	95 (10.48)
on the other hand	102 (5.33)	23 (1.28)	11 (1.21)

as the same time	0 (0.00)	0 (0.00)	0 (0.00)
but	1080 (56.43)	1380 (77.08)	331 (36.53)
and	3743 (195.56)	3522 (196.71)	2531 (279.32)
in fact	47 (2.46)	84 (4.69)	8 (0.88)
actually	44 (2.30)	66 (3.69)	23 (2.54)
as a matter of fact	9 (0.47)	1 (0.06)	1 (0.11)
conversely	0 (0.00)	2 (0.11)	4 (0.44)
in/by comparison	1 (0.05)	1 (0.06)	2 (0.22)
in/by contrast	1 (0.05)	2 (0.11)	0 (0.00)
in reality	5 (0.26)	0 (0.00)	1 (0.11)

ENS を基準として、CLE、JLE の各々がそれぞれの副詞を過剰ないし過少使用しているか確認するため、実頻度に対してカイ二乗検定を行った。

その結果、3 種の副詞について学習者側の過剰使用が確認された。on the hand は CLE のみ ($\chi^2(1)=24.98$; $p < .001$; $\phi=0.0096$)、but は CLE ($\chi^2(1)=48.51$; $p < .001$; $\phi=0.0132$)、JLE ($\chi^2(1)=156.25$; $p < .001$; $\phi=0.0241$) の両方、in fact は CLE ($\chi^2(1)=7.02$; $p < .001$; $\phi=0.0053$) と JLE ($\chi^2(1)=24.49$; $p < .001$; $\phi=0.0097$) 両方が過剰していた。

また、2 種の副詞について学習者側の過少使用が確認された。and は CLE ($\chi^2(1)=197.97$; $p < .001$; $\phi=0.0265$) と JLE ($\chi^2(1)=186.71$; $p < .001$; $\phi=0.0263$) の両方、conversely は CLE のみ ($\chi^2(1)=5.62$; $p < .001$; $\phi=なし$) が過少使用していた。

以下、有意差が確認された対比型連結副詞に限って質的な検討を行う。まず、CLE のみが過剰使用していた on the other hand の用例を示す。

(5) ...But on the other hand, it's very well for students to join the school club activity.

They can chat with each other who are also students; ...(CHN_PTJ_041_A2)

上記より、一部の CLE は、But を文頭におき、英語として不自然な“*But on the other hand*”を決まり文句として暗記しているようである。この背景としては、中国において、逆説表現を反復使用する「……(日本語訳直訳)」などの表現が影響している可能性もあるだろう。なお、CLE による on the other hand の過剰使用は先行研究である Shi (2017) や Leedham & Cai (2013) の報告と一致している。

次に、CLE、JLE がともに過剰使用する but と in fact の用例を示す。

(6) ...For another, smoking bring harms to not only the smoker himself but also the people around him, that is to say, the people all around the smokers have to pay their health....(CHN_SMK_198_A2)

- (7)...Smoking is harmful for not only smoking people but also people around them....(JPN_SMK_274_A2)
- (8)...In fact, I have a lot of friends who want to become teachers....(JPN_PTJ_027_A2)
- (9)...In fact, I have many reasons for this view. As we all know, the world has a large number of smokers....(CHN_SMK_117_A2)

but について、学習者は not only A but also B (A でなく B も) という決まり文句を非常に多く使用している。また、in fact を文頭に置き、その後ろに自分の意見を述べるパターンも多用している。こうした一部の特定の表現パターンへの依存度の強さが、CLE、JLE ともに、これらの表現を過剰使用する一因になっていると考えられる。

続いて、学習者の過少使用が確認された 2 種の対比型連結副詞に注目する。はじめに and について、ENS と学習者の用例をあわせて示す。

- (10)...I've held internships in both of my summers here at university, and I think that I am a much stronger job candidate than my classmates who do not have such experience....(ENS_PTJ_007_XX1)
- (11)...In recent years, more and more college students choose to take part-time jobs in college.... (CHN_PTJ_115_A2)
- (12)...Especially, students who live alone have to get a lot of money to pay fee for house, energy, gas, and so on....(JPN_PTJ_356_A2)

(10)の例にあるように、ENS は、「インターンをした」という自身の経験と、「それによって成長したと感じる」という自身の見解を接続詞の and でつないでいる。こうした and の使い方は接続詞の本来の用法に基づくものである。一方、学習者は、and の使用が絶対的に少ないだけでなく、少数の使用事例の多くが、more and more (ますます多くの) や and so on (～など) といったイディオムの一部となっている。このことは学習者が接続詞としての and の用法を十分に把握できていない実態を示唆するものと言えるだろう。

続いて、conversely に関して、ENS の用例を示す。

- (13)... Some restaurants market their cuisines more towards the adult crowd, and as such an establishment, I feel that smoking is not only appropriate but rather in an enhancement of the mood and atmosphere. Conversely, family restaurants where there will often be small children should be off limits to smoking....(ENS_SMK_035_1)

(13)において、ENS は「成人向けのレストラン」と「子ども向けのレストラン」を対比的にとらえ、両

者における喫煙の位置づけの違いを、接続詞の **conversely** で併記している。このように、対比的な内容を提示する際に **conversely** が効果的に使用できる。

一方、CLE はこうした使用の前提となる概念の対比化自体に困難さを覚えているようである。以下の例を見てみよう。

(14) ...In Chinese traditional custom, many people getting together are a pleasure, especially in a restaurant. However, the reality is that many people smoke in restaurants. (CHN_SMK_142_B1_1)

(14)において、CLE は、「大勢がレストランで集まることは正しい」という前半内容と、「レストランで喫煙する人も多い」という後半内容を **however** によって逆説的にとらえているが、これらの内容は厳密に言えば、逆説ではなく、また、対比にもなっていない。このような用例が多くみられることは、CLE が単に **conversely** という語を使えていないというだけではなく、その前提となる概念の対比化・対照化自体を苦手としている可能性を示唆するだろう。

以上をまとめると、過剰使用に関しては、**on the other hand**、**but**、**in fact** が過剰使用の項目に該当する。これらの過剰使用が確認された項目のうち、**on the other hand** だけは、CLE に過剰使用されている。**on the other hand** を除くほかの 2 種は JLE や CLE 両者による過剰使用が見られた。次に、過少使用に関しては、**and**、**conversely** が過少使用の項目に該当する。過少使用の傾向が確認された項目のうち、**conversely** だけは、CLE に過少使用されている。また、CLE と JLE の共通傾向として、**but**、**in fact** を過剰使用し、**and** を過少使用することが確認された。JLE に比べ、CLE のほうが独自の過剰過少使用語が多い。用例検証を用いて、過剰使用や過少使用が確認された対比型連結副詞の多くはイディオムの一部として使われていることが示された。また、その用法は ENS の用法と異なり、母語や英語教育による影響の可能性が高いと示唆される。

4.2 RQ2 英語学習者が使用する対比型連結副詞の習熟度別使用度

RQ1 では、CLE、JLE、ENS の各々が使用した 12 種の対比型連結副詞について、実頻度と、1 万語あたり調整頻度を調査し、学習者が 3 種を過剰使用し、2 種を箇所使用していることが明らかになった。ただし、過剰・過少使用される 5 種の表現の使用度に関して習熟度の差が生じている可能性もある。そこで 5 種の表現に限って習熟度別の調整頻度を比較したところ、図 1-4 の結果を得た。なお、図中、青線は CLE 頻度を、灰色線は JLE 頻度を、オレンジ色の線は ENS 頻度を示す。

図 1-3

過剰使用が確認された 3 種の表現の習熟度別頻度変化

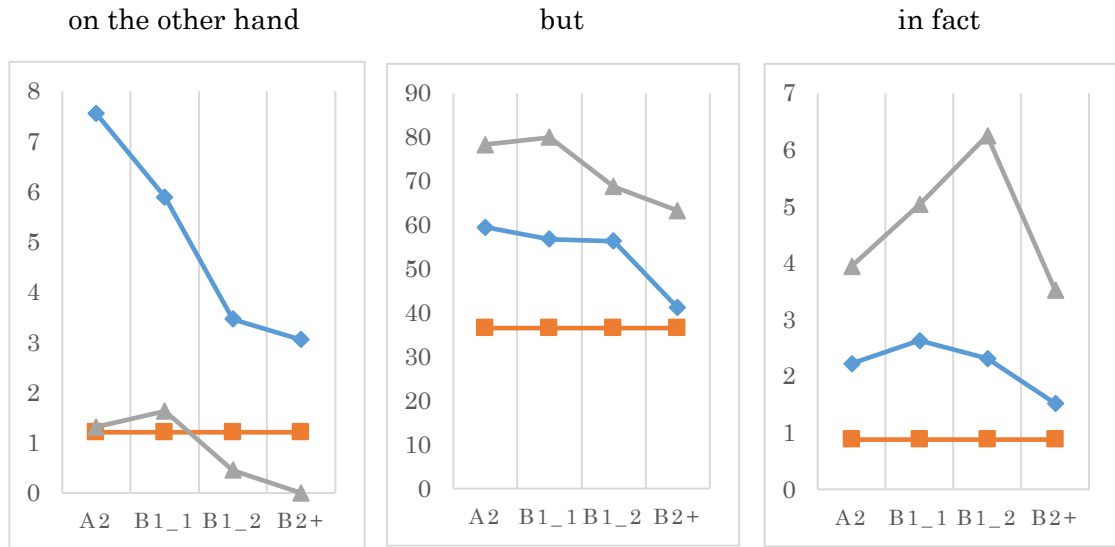
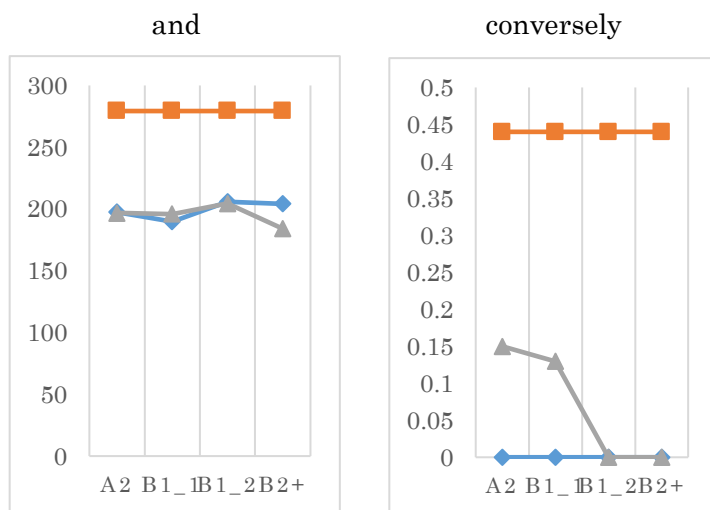


図 4-5

過少使用が確認された 2 種の表現の習熟度別頻度変化



まず、学習者が過剰使用する 3 種の対比型連結副詞の習熟度別頻度変化に注目する。1 つ目の **on the hand** は、CLE、JLE ともに、線形的な減少傾向が確認された。ただ、これにより、CLE は ENS 頻度に近づいているが、JLE はむしろ ENS 頻度からの乖離が広がっている。この結果は、CLE は習熟度の向上に伴い母語話者に近い使用傾向へと収束しているのに対し、JLE は習熟度が向上しても母語話者の使用傾向に接近しない可能性を示唆する。

2 つ目の **but** は、**on the hand** 同様、CLE、JLE ともにほぼ線形的な減少傾向が確認された。また、いずれの場合も ENS 頻度に近接している。このことから、**but** は比較的高頻度の接続詞表

現であり、習熟度の向上に伴って過剰使用が自然に調整され、学習者の母語に関係なく母語話者に近い使用頻度へと収束しやすい表現であることが示唆される。

3 つ目の *in fact* は、CLE、JLE とともに一度頻度が急上昇して、その後急減するという特異なパターンを示しているが、結果的にはどちらも ENS 頻度に近接している。この結果は、*in fact* が中級段階において、強調や説明のための連結副詞として一時的に過剰使用されるものの、習熟度の向上に伴い学習者は *in fact* の制約に対する理解が進み、より適切な使用頻度に調整される過程が存在することを示唆する。

続いて、学習者が過少使用する 2 種の対比型連結副詞の習熟度別頻度変化に注目する。1 つ目の *and* は、JLE が B1_2 以降若干減少しているという傾向はあるものの、総じてみれば、4 段階のレベルにおいてははっきりした変化は見られず、ENS 頻度との近接は全く見られない。このことは、*and* の対比的用法が学習者にとって習得が困難であり、習熟度が向上しても母語話者に見られるような使用には至らないことを示唆する。

2 つ目の *conversely* については、初級の JLE が例外的に数回使っていたことはあるものの、それを除くと、JLE、CLE とともに、ほぼ一貫して使用できていない。この結果は、*conversely* が学術的な性格の強い連結副詞であり、十分なインプットや明示的指導がなければ習熟度が向上しても自然な使用に至らないことを示唆する。

さらに、RQ2 においても、学習者の用例を通して 2 つの傾向を観察したい。まず、CLE における *but* 使用が線形的に減少していくことに関して、初級に相当する A2 と、上級に相当する B2 を比較したところ、以下のような用例が多数見つかった。

(13)...In fact, smokers still have the freedom of smoking. But, I think, smokers had better give up smoking, not only in private places, but also everywhere....
(CHN_SMK_216_A2)

(14)...On the other hand, it can release our family financial burden. However, there also are many disadvantages. If we take part-time jobs, it is likely for us to distract from our studying....(CHN_PTJ_172_B2)

(13)において、A2 学習者は短い箇所にも *but* を 2 度反復して使用している。文脈的に、最初の *but* は *however* などへの置き換えも十分に可能であるが、学習者は他の表現を使用しようとはせず、*but* のみを反復的に使用している。これに対し、(14)の場合、B2 学習者は文脈に即して、*on the hand* や *however* などの多様な表現を併用しており、結果的に *but* の使用頻度は低下している。これらの例は、A2 から B2 にかけて *but* の使用が減り、他の関連表現に置き換わっていくことを示唆している。

また、RQ1 ではすでに *and* の過少使用について用例検証をしたものの、習熟度の変化は *and* の過少使用に影響がない理由を用例検証したい。したがって、以下の用例を確認しよう。

(15)...Nowadays, more and more college students would like to do some part time jobs, the majority of whom tend to be tutors....(CHN_PTJ_329_B2)

学習者は、B2 レベルでも初級学習者の and 使用に大差がないため、学習者が and をイディオムの一部としてしか認識していない状況は変化しないといえる。そのため、RQ1 で得られた知見をすべての習熟度の学習者に指導する必要がある。

以上にまとめると、CLE において、線形減少の傾向が見られる対比型連結副詞は on the other hand、but であり、in fact は A2 から B1_1 まで使用頻度が増加し、その後減少する傾向がある。and の使用頻度は習熟度との関係が限定的であり、用法に関する指導をしない限り、習熟度が上昇しても、and をイディオムの一部しか使用しない可能性が高い。また、conversely の使用頻度が 0 であるため、conversely の使用に関する指導が必要といえる。JLE において、過剰使用や過少使用が確認された 5 種の対比型連結副詞はいずれも母語話者の使用頻度に接近しない傾向にあり、5 種の対比型連結副詞に指導が必要である。

4.4 RQ3 習熟度別英語学習者と母語話者が使用する対比型連結副詞

RQ3 では、代表的な対比型連結副詞の文頭率を調査し、対比型連結副詞の使用に当たる知見を考察した。本節では、学習者の母語背景や習熟度によって、対比型連結副詞の使用がどのように変化するのかを考察する。9 群 (CLE:4 群、JLE:4 群、ENS:1 群) における指標別平均頻度表を作成し、対応分析を実施した。その結果、図 6 の散布図を得た。なお、散布図は横軸と縦軸で 4 つの領域に区分されるが、

以下では、右上象限を象限 1 と呼び、以下、反時計回りに象限 2・3・4 と呼ぶ。次元 1 (横軸) と次元 2 (縦軸) の合計寄与率は 78.6% となっており、データの持つ分散の 7 割以上が説明されている。

図 6

母語別学習者、習熟度別学習者、対比型連結副詞の関係性 (対応分析)

熟度の上昇が対比型連結副詞の使用状況の改善に直接的に結びついていない可能性を示す。

なお、上記で概観した2つの軸によって、グラフ平面は、4つの象限に区分されることになる。以下、各象限に入る項目を概観していきたい。

まず、第1象限で特徴的な対比型連結副詞は *as a matter of fact*、*in/by contrast* であるが、これらと明確に関連した学習者ないし ENS は存在していない。

次に、第2象限には、CLE_A2 と CLE_B1_1 が含まれる。習熟度が A2 と B1_1 であるため、第2象限は初級 CLE の象限といえる。その特徴的な対比型連結副詞は *in reality*、*on the other hand* である。

続いて、第3象限は、中上級 CLE と ENS が該当する象限であり、その特徴的な対比型連結副詞は *and*、*in/by comparison*、*conversely* である。

最後に、JLE 全般は第4象限に集中しており、その特徴的な対比型連結副詞は *actually*、*in fact* である。

また、さらに、JLE の特徴語は1語ベースの対比型連結副詞に対し、初中級 CLE の特徴語は成句ベースの対比型連結副詞である。ENS と上級 CLE の特徴語として、*conversely*、*in/by comparison* が挙げられる。

以上の結果をまとめると、次の表になる。

表 4

各象限にある参加者と対比型連結副詞

象限	参加者群	特徴的な対比型連結副詞
II	初級 CLE	特有のイディオム (<i>in reality</i> , <i>on the other hand</i>)
III	中上級 CLE+ ENS	相対的に難易度の高いイディオムや難語 (<i>and</i> , <i>in/by comparison</i> , <i>conversely</i>)
IV	JLE 全般	平易な1語副詞や短く平易なイディオム (<i>actually</i> , <i>but</i> , <i>in fact</i>)

CLE は習熟度の上昇により、母語話者の対比型連結副詞使用に近づき、中上級になると、母語話者と同じ象限に入ることが確認された。それに対し、JLE 全般は第4象限に集中しており、習熟度が上昇しても母語話者の対比型連結副詞使用に近づかないことが示された。したがって、英作文の対比型連結副詞使用に関して、JLE に対する指導が極めて重要になる。

5. まとめ

本研究は、ICNALE を使用し、中国人英語学習者、日本人学習者、および母語話者による英作文で使用される対比型連結副詞を調査し、望まれる使用傾向を考察した。以下、RQ ごとに本研究から得られた知見を整理する。

RQ1 では、JLE と CLE における対比型連結副詞の調整頻度を ENS の調整頻度と比較し、英

作文で過剰使用される対比型連結副詞と過少使用される対比型連結副詞を調査し、用例検証を用いてその結果になった理由を考察した。その結果、JLE は *but*、*in fact* を過剰使用し、*and* を過少使用することが示された。一方、CLE は *on the other hand*、*but*、*in fact* を過剰使用し、*conversely*、*and* を過少使用することが示された。CLE のほうが独自の過剰過少使用語が多いことが明らかになった。さらに、用例検証をした結果、初級 CLE は、*but* を文頭に置き、英作文で不自然な使用として“*but on the other hand*”を決まり文句として暗記している可能性が示された。また、*and* が過少使用される原因として、JLE と CLE は *and* をイディオムの一部として認識しており、ENS のように事実と個人意見の接続詞として使用されないことが確認された。

RQ2 では ENS の対比型連結副詞使用を参考に、JLE と CLE の対比型連結副詞使用を習熟度別 (A2、B1_1、B1_2、B2+) に比較し、その違いを考察した。その結果、CLE において、線形増加の傾向が見られる対比型連結副詞は *however*、*actually* である。線形減少の傾向が見られる対比型連結副詞は *on the other hand*、*but*、*as a matter of fact*、*in reality* である。また、JLE において、線形増加の傾向が見られる対比型連結副詞は出現しなかったが、線形減少型の対比型連結副詞は *conversely*、*in/by comparison*、*in/by contrast* である。これらを用例検証で考察すると、初級 CLE は、逆接系をすべて *but* で表現するに対し、上級になると、対比・逆接等を区別でき、ダイバーシティがある表現を使用できるようになる。また、*and* は習熟度の上昇につれて、ENS の使用頻度に接近しない原因として、学習者が *and* をイディオムの一部としてしか認識していない状況は変化しないことにある。

RQ3 では対比型連結副詞使用において、学習者の母語背景や習熟度による影響を ENS との比較で、考察した。その結果、CLE に関しては、A2 から B2 に向けて ENS に順調に近接しており、習熟度の上昇につれて自然な対比型連結副詞使用ができていく可能性が高いことが示された。一方、JLE の対比型連結副詞使用に関しては、極端に CLE と ENS から逸脱していて、習熟度の上昇が対比型連結副詞使用に有意な影響を与えていない可能性が高いことが示された。

以上の知見が明らかとなったが、本研究には一定の課題が存在する。以下は、課題別に言及する。1 点目は、本研究の調査対象とした対比型連結副詞を調査する際に、対比型連結副詞以外の用法も網羅的に調査したことである。したがって、調整頻度の結果や過剰使用と過少使用の判定に影響を与えている可能性も考慮に入れる必要があるだろう。また、2 点目は、RQ1 における 12 種の表現に対してそれぞれ 2 回の検定を実施しているため、検定反復による有意水準の緩和の危険性が生じていることである。3 点目は、RQ2 において観察された習熟度別の変化パターンに検定を行っていないことである。そのため、実際に得られた結果が誤差である可能性があり、今後は二次配置分散分析による有意差検証が必要である。4 点目は、本研究の対象学習者が CLE と JLE に限定したことである。日中の学習者を比較したが、今後は日中以外の学習者を調査し、より深い知見が得られるように考察する。

以上の 4 点を本研究全体の課題としたい。本研究は、学習者コーパスを活用し、学習者の英作文における対比型連結副詞の特徴を考察した。対比型連結副詞の指導に関して、従来の主観的

指導だけではなく、学習者コーパスを用いて、客観的データに基づく指導が可能になることが本研究の意義である。

引用文献

- Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S., & Finegan, E. (Eds.). (1999). *Longman grammar of spoken and written English*. Longman.
- Carter, R., & McCarthy, M. (2006). *Cambridge grammar of English*. Cambridge University Press.
- Huddleston, R., & Pullum, G. K. (2002). *The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge University Press.
- Ishikawa, S. (2011). A corpus-based study on Asian learners' use of English linking adverbials. *Themes in Science and Technology Education*, 3(1), 139-157.
- Liu, D. (2008). Linking adverbials: An across-register corpus study and its implications. *International Journal of Corpus Linguistics*, 13(4), 491-518.
- Maria, L., & Cai, G. (2013). Besides...on the other hand: Using a corpus approach to explore the influence of teaching materials on Chinese students' use of linking adverbials. *Journal of Second Language Writing*, 22(4), 374-389.
- Shi, J. (2017). A corpus-based study of contrastive/concessive linking adverbials in spoken English of Chinese EFL learners. *Studies in Literature and Language*, 14(2), 17-25.
- 清水裕士 (n.d.). HAD (v.18). <https://norimmune.net/had>
- Wang, Y. (2022). Linking adverbials in argumentative essays of advanced EFL learners: A corpus-assisted analysis. *Korean Journal of English Language and Linguistics*, 22, 396-417.
- Zhu, S. (2025). A contrastive study of Chinese and English adversative conjunctions based on the CCL Corpus: A case study of '但是' and 'but'. *Modern Linguistics*, 13(1), 182-190.